芸術は平等

糀谷　終一

秋近くなると、芸術作品展の記事を新聞などでよく目にすることがあります。私も数年前に、ビッグアイの障碍者作品展に切り絵で応募したことがありますが、私よりもすぐれた作品が多く、落選はしましたが、良い経験をしたと思っています。

私は昭和五十五年、自転車に乗って走っていた時に、後から高校生が運転する車に撥ね飛ばされ、頚髄損傷による四肢麻痺となり、車椅子障碍者になってしまいました。

この障碍になって一番困ったことは、鉛筆やボールペンで字がかけなくなったことです。

それは首から下がマヒをしたために、手に力が入らなくなったからです。その為、今までしっかり書けた字がスラスラと書けなくなりました。だから、人に代筆をお願いするという不自由さを余儀なくされました。

手持ち無沙汰をしていたある日のことです。友人がリハビリのために「水墨画でもしたらどうだ」と言ってくれました。絵を描くことが好きな私は、鉛筆やボールペンで書けなくても毛筆なら何か書けるんじゃないかと思い、トライをすることに決めたのです。そして、その思いを、私がお世話になっているボランティアの人に話すと、その人から藤井寺市には「障碍者ふれあい支援センター」があることを教えてもらいました。このセンターでは、健常者の先生が障碍者の人達に、書道や水墨、茶道などを教えて下さるということです。私は早速、水墨画を習うことにしました。墨なら力がなくても描けます。ただ、勉強が進むにつれ車椅子に座っての筆運びは大変であることが分かったのです。それは筆が長いと、細かいところがうまく描けないからです。どうしようかと思っていた時に、工作の趣味のあるボランティアさんが、「いいよ、切ってあげる」と言って、わざわざ、私の家まで来て下さり、長い筆を切ってくれました。私の手に合うまで、何度も何度も切って下さったのです。大・中・小の筆あわせて九本です。障碍者の私のためにここまでして下さるとは夢にも思いませんでした。そのお陰で、山や木々や鳥がスムーズに描けるようになったのです。それからの毎日は本当に充実した毎日でした。

多くの人の手を借り学んできた水墨画も、習い初めて早や五年が過ぎました。少しは様になったと思うようになり、また、先生からも褒めてもいただけるようになりました。

作品は随分たまりましたが、発表の場が近くにはありません。先生は、私の作品はどこへ出しても引けが取らないから個展でもとまで言って下さいましたが、嬉しい半面、お金もありませんので、発表に関しては半ば諦めていました。

そんな折、藤井寺市の広報紙に「ふれあい市民まつり」の記事が載っていたのです。そして、その記事の中に市民向けの作品募集がありました。

藤井寺市民であれば障碍の有無に関係なく誰でも応募することができるのです。これは私にとってまたとないチャンスと思い早速、協働人権課へ行き申し込みをしました。

当日の「ふれあい市民まつり」は市民ギャラリーが人で溢れていました。私も自分の作品の場所確認のため車椅子を漕いで行きました。そして、一般市民の作品の中に私の作品が並

んでいるのを見て、何とも言えない感動を味わい、早速私の作品の前で、係の人に頼んで写真を撮ってもらいました。

水彩画の中に、障碍者である私の水墨画が黒々と光っているように見えたのも嬉しさからだと思います。ある市民の男性が、「へー、細い線やぼかしがよう描けてるなー」と言って下さったのを耳にしたときは、やはり、続けてきて良かったと思いました。

私は、芸術に障碍の有無などの隔たりはないと思っています。

昔、私は健常者の人と車椅子ダンスをしたことがあります。健常者と一体になってダンスをすることは、私が障碍者であることを忘れさせてくれます。それは共に踊るという目的が同じであるから、健常者も障碍者も皆平等になれるのです。

また、私が小学五年生の時、ピカソの絵を見てびっくりしたことを覚えています。ピカソのあの幾何学的模様の人物画だったからです。これなら私でも描けるんじゃないかと子供心に思ってしまいました。事実、私の友で障碍を持った彼が、ピカソタッチで素晴らしい絵を描いたのを今でも覚えています。

お陰で、私の心の中では、芸術には、障碍の有無は関係ないと思うようになり、今でもそう確信しています。

芸術という同じ土俵で、障碍者も健常者もハートをぶつけ合う。そこに真の芸術が生まれてくるのだと思っています。

また、障碍者の芸術作品が、何の隔たりもなく健常者の手に取ってもらえることこそ、差別のない世界だと私なりに思っています。

芸術は感性の世界です。そこにはうまい下手はありません。芸術こそ、障碍者は健常者と対等に楽しめる世界です。だからこそ、健常者と同じ発表の場をもっともっと提供して欲しいと思っています。

私はこれから、私が知り学んだ水墨画のすばらしさを、健常者の子供たちに伝えて行きたいと心に思っています。